李炳憲における日本把握

小林　寛

要旨

李炳憲は宗教と哲学との合一をとなえ、「神道設教」に重きをおいて宗教をとらえている。儒教を孔教へと変革したうえで、世界の宗教と哲学とはひとつになるとして、日本の宗教も孔教に合一すると捉えている。近代化の中にあって李炳憲は孔教運動による祖国の自立を考えながらも、一方では儒教に深く帰していない日本はかえって世界を大道にみちびく役割を有していると、位置づけようとしている。

キーワード　李炳憲　孔教　大同　今文

はじめに

李炳憲は儒教を今文経学の孔子の本来の面目に戻し、儒教を孔教へと革新すべきだとした。「宗教哲学合一論」ではキリスト教も佛教も儒教も道教も、諸哲学も孔教によって合一し「大同」する時代を迎えるという。李炳憲は日本が半島を「併合」[1]した時期に孔教運動を展開していて、日本の出版物にも接していた。近代化を進める日本が半島において「総督」する諸事に対し、それらにとまどいながら、康有爲の孔教運動によって近代化した祖国を造るために国権回復を図ろうとする。本稿においては近代化と日本化との葛藤を有する李炳憲の日本認識は孔教の観点からする再把握であったことを見ておきたいと考える。

1　李炳憲と近代

李炳憲は一八七〇年に生まれ、一八九七年、二七歳に郭鍾錫に会い、朱子学を受業した。[2]三四歳に『中庸』を読みながら、儒教保守のための「保教の念」を持ったという。ソウルに上京し南山に登った折、日本人が敷設する電車と電線、鉄道と鉄橋の架設等に開化文化を見つつ、個人として自己を善に保つ伝統道学の「獨善」の方法が新しい時代に対応するのに限界があることに慨嘆した。『戊戌変法記』を読んで、東アジアの変化と康有為がよく世務に通じ、しか

も旧を守りつつ新を排さずして自立の計を為していることを知るに至り、これを契機として『泰西新史』等の西洋近代文物に関する書籍を求めて読み、その後、アメリカ人アレンの『万国広報』に触れ、世界の情勢に対する知識を吸収しつつ、既に開化思想への転換を自ら成していたという。

一九一〇年、四一歳に、日本が大韓帝国を「併合」する事態に遭遇し、教育が最大の急務であると覚り、郷里の書堂で義塾を設けるために尽力した。しかし、「私立学校令」によってこれがかなわず、ソウルに再び上京し、朴殷植と孫秉熙らに会いつつ、愛国啓蒙思想を形成した。彼は中国の革命運動の報に接し、中国へ渡行する決意をした。

一九一四年、四五歳に中国へ渡行し、康有為と出会い、これが儒教改革思想家として彼の一生の重大な契機となった。李炳憲は北京で孔教会と孔道会を訪問し、当時北京で活動していた李承薫に会い、孔教会本部がある曲阜を訪問しながら孔教運動に専念するようになる。このとき、李炳憲は北京にいながら、そのときまでの自分が形成してきた思想的認識を整理し、『宗教哲学合一論』を著した。康有為は李炳憲に儒教を民族精神の生命力を起こす宗教として覚醒し、儒教を再建することで国権の回復を図ることができると強調した。李炳憲が朱子学と陽明学のどちらに注目したら良いか尋ねると康有為は陽明学を重視することを述べている。李炳憲は康有為と出会い、教えに感受するところが大きく、康有為を李承薫と朴殷植に紹介している。そして、朴殷植とともに再び康有為に会う。

一九一六年、四七歳に、また半島から中国へと渡行し、杭州に康有為を尋ねた。朴殷植とともに康有為と会談しつつ、「韓国儒教」の改良問題を長時間討論した。さらに国府を訪問し、孔教会総会に参加した。帰国して後、儒教を宣伝し国粋を保持しようとする意志から『中華遊記』を著述した。この時期に朝鮮総督府は、「宗教令」を発表しつつ、儒教を宗教から除きつつ「共同墓地管理規制」によって祭礼は必ずしも儒教によらないとした。このことに対し、李炳憲は「韓国人」が生きて儒教を守ることができなくなり、亡くなっても家族単位の廟に入ることができなくなることだとし、これが民族精神を忘れ民族の消滅を招く遠因となると考える危機感を持って反対の意志を明らかにし、朝鮮総督府に数通の長書を送っている。

一九一八年から孔教を保持するために文廟を設立して教祖を尊敬して義理を守ろうと決意し、李退渓の後孫の長老たちを訪ね、培山書堂の設立、改革に同意を求めている。一九一九年に李炳憲は『儒教復原論』を著述し、孔教思想の基本体系を確固たるものとし、同時に日本政府と日本首相の大隈重信に儒教を宗教として認めるよう願う書簡を出している。彼は、孔子の聖像と通行している経典を康有為の助けを得て中国から招来するために中国へ行くことを計画する。彼は大同斯文会と陶山書院の協力を仰ぎつつ、一九二〇年、五一歳に第三次の中国訪問をした。このとき康有為は李炳憲の『儒教復原論』を論評し、今文経学の重要性を積極的に述べつつ今文と古文の分別を明らかにせずに公羊伝の理論が明らかにされねば孔子の三世説と太平、及び大同の意味が表れてこず、今日の変革に対応することができないとした。そして、本源の学問は必ずや今文によってこそ可能であるとした。これによって李炳憲は康有為の『新学偽経考』を中心として今文学研究と自国の歴史とに心を用いて、現時代の大勢に相通しようとするのだとして儒教的に歴史を記述した

『歴史教理談』を著す。

一九一三年、培山書堂の文廟と道東祠が落成し、五四歳に第四次中国訪問をし、青島に康有為を訪ねた。このとき康有為は李炳憲にヨーロッパが功利主義と進化論によっていて人々に安心を与えることができず、だからこそ孔子の核心を尊重する状況が起こっていることを述べつつ、同時に中国にあっても、孔子を尊重する雰囲気が回復していることで、孔教運動が時代的要請を受けていることを強調した。特に康有為は李炳憲の著述を見、新しい儒教を生み出す力があると認め、今日、東方に新しい儒教が行われることは今より始まるのだとした。李炳憲は一方では今文経学の文献を求め、もう一方では朴殷植、李始栄、趙琬九・金九等の臨時政府の要人たちからも倍山書院の支持をうけ、孔阜から孔子の聖像を招来して帰国した。この聖像が倍山書堂に置かれた。聖像は書堂の文廟にまつられ、釈奠が挙行されている。後に倍山書院の道東祠に李退渓と李曹植が祠られ、李炳憲自身の先祖である李源・李光友もともに祠られた。しかしこのことが地方の保守的儒林の批判を招き、祭祠が中断する事件が起こっている。

一九二四年、李炳憲は日本の帝国図書館に出入りして資料を収集する等、孔教の経典としての基礎である今文学研究を続け『孔教大義』を著述した。一九二五年、五六歳に第五次の中国訪問し、杭州の康有為を訪問してそれまでの経過を報告している。この時、同文印書局を訪ね『儒教復原論』『孔教大義』『業書』を印刷した。一九二六年、中国から帰国して後、『詩経附注三家説考』『書経伝注今文説考』『礼経今文説考』『易経今文考』『春秋筆削考』を著述し、今文教学の体系的理解を追求し続け、[3] 一九四〇年に没している。

3　李炳憲の孔教と「神道設教」

李炳憲において儒教は宗教であった。李炳憲が考える儒教の性格については「儒教復原論」にそれが表れている。

問ふ、儒教とは何の教ぞやと。答ふ、儒教とは孔子の教也と。問ふ、この教也、堯舜禹湯文武周公の道を修めて教と為す者に非るかと。答ふ、孔子の道は固より堯舜文武の道にして其の教を為す所以は則ち異る也と。問ふ、詳かに得て聞く可きかと。答ふ、諸を水に譬ば江淮河済固より水也。東海も亦た水也。然るに江淮河済則ち九州の内に流通し、東海則ち諸を四溟の外に放つ。孔子の堯舜禹湯文武周公の道を修めて集大成するは猶ほ東海の江淮河済の水を収めて大洋を為すがごとき也。故に堯舜禹湯文武周公の道則ち支那の一世に行はれて孔子の教則ち大地の万世に垂る。蓋し能く天下後世の大衆を救ふが故に教と曰ふ。且つ孔子は儒者也。特に儒を以て其の教を名づくるなり。[4]

儒教とはいかなる教えかという問いについて儒教は孔子の教えであると答える。ではこの教は堯・舜・禹・湯王・文王・武王・周公の道を修めて教とするものとは異なるのかという問いに、孔子の道はもとより堯舜文武の道でおなじではありながら教を為す所以を異にしていると答える。詳かに得て聞くことができるかという問いには、これを水に譬えるならば長江・淮水・黄河・済水ももとより水であって東海もまた水でおなじあって、然るに江淮河済は九州の内に流通し、東海はこれを四溟の外に放つものであって、孔子が堯舜禹湯

文武周公の道を修めて集大成したのはちょうど東海が江淮河済の水を収めて大洋を為しているようなものだと答え、故に堯舜禹湯文武周公の道は支那の一世に行われた教えで孔子の教は大地の万世に垂れるもので、おもうに能く天下後世の大衆を救うものであるために教というのだとしている。さらに孔子は儒者であって特に儒によってその教を儒教と名づけたものだという。ここからすれば儒教と孔教とには本質的な差異があるのではなく時空の広大さ量の差異があるのみであることになる。また、「問ふ、吾道の統堯舜禹湯文武周公孔子自り以て顔曾思孟程朱退栗に至るまで皆以て是れ伝受す。而して子儒教と言へば則ち単に孔子を挙ぐるは何ぞやと。答ふ、上は堯舜禹湯文武周公の聖有り。而も孔子の大且つ備に若かず。[5] 下は顔曾思孟は亜聖の才を以て当に志を継ぎ事を述べて未だ体を具へるも微なるを免れず。程朱退栗は則ち愈よ降りて愈よ殺れ大道漸く隠る。況や儒教の名専ら孔子に因て発すれば則ち孔子の我が独一無二の教主為るは亦た較然として明らかなること甚しからず乎。印度無量の諸仏有ると雖も仏教を為すは必ず釈迦世尊を称す。猶太許多の先知無きに非ずして景教を為すは必ず耶蘇基督を称す。その意亦た猶ほ此のごときなり。[6]」として、儒者にとって、吾が道統である堯・舜・禹・湯・文・武・周公・孔子から顔回・曾参・子思・孟軻・二程子・朱熹・李退渓・李栗谷に至るまで皆儒教の道統を伝受しているのに、先生が儒教と言うときは単に孔子を挙げるだけなのはなぜかという問いに、上つかたは堯・舜・禹・湯・文・武・周公の聖があっても、孔子の大かつ備なることにはおよばないし、下つかたは顔回・曾参・子思・孟軻は亜聖の才を以てまさに志を継ぎ事を述べて未だ体を具えたとしても微であることを免れないし、二程子・朱熹・李退渓・李栗谷については、いよいよ時代が降りいよいよまぎれて大道はしだいに隠れてしまっている。ましてや儒教の名は専ら孔子によって発ったものであるからには孔子が我が儒教の独一無二の教主であるのは亦た較然として明らかであることは甚しいことでないことはなかろうか。印度の無量の諸仏があるといっても仏教をいうのには必ず釈迦世尊をいう。ユダヤ教には許多の先知が無いわけではないのに景教をいうのには必ず耶蘇基督をいう。その意は亦たちょうど儒教の場合のようなものであると、答えている。李炳憲は半島の儒者らしく李退渓・李栗谷の名を掲げている。しかしながら李退渓・李栗谷についてさほど高い評価を与えないことについては今文学の立場からして当然ではあっても半島の儒者の反発を生ずる遠因となっている。宗教という語について李炳憲は次のように記していた。

問ふ、儒教の宗教たる所以、孔子の教祖たる所以の者、得て詳かに聞く可き歟と。

答ふ、宗教の称、訳するに英文の釐里尽 Religion 自りして来たる。日本の維新の初に在りて釐里尽を訳して宗教と為す。或ひは法教と称するも当時、宗字を用ふるに因る。然るに儒教の教の字、毫末も加へずして其の意自ら足れば則ち必ずしも宗の字を添へざる也。但だ、挽近以来、極東の名詞、世界現行の教を以て通じて之を宗教と謂ふ。而して宗の字、又、神秘的色彩を帯ぶれば、則ち烏んぞ孔子を以て非宗教家と為さんや。孔子の孔子たる所以は則ち其の教主たるを以てす。其の教主たる所以は則ち配夫の量の、万世の民を救ふを有するを以てする也。蓋

し四代の礼楽、三統文質、何ぞ聖王の隆起の、一字の義制に非ざる無し。而して能く万世に通ずるは孔子也。精気游魂よりして鬼神の情状を発す。大易の窮神と曰ひ尽神と曰ふは精霊界の事を為すに非ざる無し。而して其の雅言に至れば則ち生を求めて仁を害ふこと無く、身を殺して仁を成すこと有り。皆、生霊を重んじて肉体を軽んずる所以、天人の極致を明らかにす。諸を西教に較ぶれば天堂地獄の論、亦た円活にして真切ならざる乎。故に諸を支那の前聖に比ぶれば則ち多く世間の法に出づ。而て諸を西方の教祖に較ぶれば多く世門の法に入る。此れ儒教の性質、西教に異る所以にして政治・哲学は孔子の余事に過ぎざる也。儒教の宗教観念、孔子の教祖の地位、此に見る可し。[7]

儒教が宗教である所以と、孔子が教祖である所以とについて詳らかに聞くことを求めるという問いをおき、ここでは答えとして以下のように述べている。宗教という名称は英文のReligionより来るもので、日本の維新の初にあって「釐里尽」を訳して「宗教」とした。ある時は「法教」といったりもしたが当時、宗字を用いたのに因ったものである。然るに儒教の教の字は毫末も加えないでも其の意は自ら足りているのであるから必ずしも宗の字を添えないのである。但だ、挽近以来、極東の名詞は世界現行の教を以て通じてこれを宗教と謂うのであって、宗の字は、また神秘的色彩を帯びているのであるからどうして孔子を非宗教家であるとすることができようか。孔子が孔子である所以は則ちその教主たるを以てするものである。その教主たる所以は配天の量の、万世の民を救うことを有することによっているのである。おもうに四代の礼楽、三統文質はどうして聖王の隆起の、一字の義制でないことがあろうか。そして能く万世に通じているのは孔子である。精気游魂から鬼神の情状を発している。大いなる易に「窮神」といい「尽神」というのは精霊界の事をいうのである。而してその雅言に至れば則ち生を求めて仁を害うことも無く、身を殺して仁を成すことも有る。皆、生霊を重んじて肉体を軽んずる所以、天人の極致を明らかにしたものである。これを西教に較べるならば天堂地獄の論は、また円活にして真切ではないか。故にこれを支那の前聖に比べるならば則ち多く世間の法に出ている。そしてこれを西方の教祖に較べるならば多く世門の法に入っている。此れこそ儒教の性質が西教に異なっている所以であって政治・哲学は孔子の余事に過ぎないのである。儒教の宗教観念と、孔子の教祖の地位とを、此に見ることができると、このように述べる。

ここに表れている「宗教」の説明において、李炳憲は康有為と同じく、日本人が英文のReligion（釐里尽）から訳出したことに言及している。[8]康有為と軌を一にしながらも異なる点は「宗教」の「宗」の字について、康有為は日本人が宗の字を付けて神教のみを内容とする概念にしたと述べるのに対し、李炳憲は「宗」の字はもとより不要で、儒教の「教」の字で意味が充足しているので宗の字を添えないと述べるに止めているところに表れている。李炳憲は「宗」の字は神秘的な色彩を帯びると言う。ここからすると「宗教」は神秘性を有する概念であることになる。そして、儒教の「教」はこの字のみで「宗教」の意味を充足しているのであるから、儒教にも神秘性が既に内在しているとする。孔子が教主である所以を述べる箇所で孔子の教が万世に通じ万民を救うものであること、又、性霊を重んじて肉体を軽んずる教であることを述べている。すなわち、儒教

は人間の現世のみを部分的に取り挙げるものではなく人間界のみならず天地のすべてを包含しているもので、かつ、性霊の、神秘的で出世間的性質を持つと李炳憲は言う。一方、西方の教祖に比べると儒教は世間に入っており、儒教は人道と神道の中庸を得ているという。さらに儒教の核心は性霊を重んじる天人の極致にあり、政治・哲学は余事に過ぎないと言う。儒教は哲学・政治・教育の言説であるとする立場を批判する。こうして、李炳憲における「宗教」は、人道に重点を置いたものではなく、神道の側面に主眼を置いた説明になっている。康有為が古代は神道を重んじ、近世は人道を重んずるように進むと説明するのとは異なった面を見せている。李炳憲は孔子が宗教の教主であることの根拠として、易の言を引いて「孔子の宗教家たるが若きに至れば則ち荘厳燦爛たる其の精義、具はりて大易の神道設教の四字に在り。豈に非宗教を以て之を目す可き乎。」[9]という。ここでは李炳憲は、孔子が宗教家であることに議論が至るならば荘厳燦爛たるその精義は大いなる易の「神道設教」の四字にそなわっているのであって、どうして宗教ではないといって孔子を見ることができようか、という。李炳憲は易の「神道設教」の四字が孔教たる儒教の宗教性を端的に表すと考えている。[10]易における「神道設教」の語は観卦の彖伝に見られる。天の神道は四時戈心わないということを主旨とする文で、秩序有るくすしき法則を神道としている。聖人は神道をもって教えを設け天下が服すというのであるから、法則にかなった道を聖人がしめすことになる。易経に云う「神道」は天地至神の道を指し「神道設教」は天道をもとにして教えを設けるならば天下の者はみな服することをいっていて、必ずしも神異を語るものではない。しかし李炳憲は「神道設教」を孔子が宗教家であることの根拠とする。李炳憲は孔子を現世の政治あるいは哲学家に過ぎないとする説に反論している。「孔子を以て非宗教家と為す侮辱の声日に高し。[11]」「一に曰く、孔子は非宗教家にして、世界の宗教家は皆な出世間の意味を含み、別に神秘の色彩有り。而して孔子は則ち現世の政治或は哲学家に過ぎざる而已と。[12]」李炳憲は述べていて、孔子は非宗教家であって世界の宗教家はみな出世間の意味をもっていて別に神秘の色彩があり、孔子は現世の政治家あるいは哲学家に過ぎないというのは鄙人の言説であるという。したがって李炳憲によれば孔子は神秘家であり宗教家であることになる。李炳憲が述べるように「神道設教」が儒教の神秘性・宗教性の根拠であるとする場合、秩序あるくすしき法則があること、道があること自体が神秘的だという解釈をすることになる。「怪力乱神」を語るのではなく、あくまでも秩序に適った力・神が存し、それを経典として設教していることが、儒教の神秘性すなわち宗教性であることにもなる。「按ずるに詩書礼楽とは何ぞや。孔子の教に非ずして皆其の名義に因りて之を裁して経と為る。易の書たるが如きは乃ち孔子神道もて教を設くる大経にして実に六経の主脳也。[13]」易経は孔子が「神道設教」によって制作した大いなる経であって、六経の主脳であるということからも、儒教の宗教性を神秘性に見ていることが理解され、さらにその神秘性は「神道設教」の「神」に存することが理解される。先に見た「観」卦について「易経今文考通論」には「設教の二字、経中の第一の着眼処也。[14]」という。「神道設教」の「設教」は経のなかでも第一の着眼点であって、「神道設教」によって聖人は救世の教主であることになる。こうして孔子が設教したのであって、儒教は即ち孔教であるという根拠となる。とはいえ

「神道」にのみ意義があるわけではないことは確認しておかなくてはならない。

或る者、佛耶の二聖は皆な出世間の法、其の情を絶ち戒を種とする所以を主とし、慾に淫することを為すこと勿れと謂ふ。投胎すれば則ち人を使て死して塵間の苦趣に堕るを免れしめ、魂を天堂に遊ばしめ、同じく極楽に幸福を享けんと欲せしむ。然れども人、本より慾を多くするが故に又た未だ形を受くるに復すことに随ふを免れず。佛耶二聖更に為して法を設け、世界を化して競争の舞台と為す。大いに兵火を降し或は付して悪疾に卑して人種を滅ぼして後同じく天堂に帰すとす。是則ち必ずしも知る可からざる事也。又必ずしも行ふ可からざる説也。是以て孔子は神道を以て設教すと雖も然れども人より遠からずして以て道を為す。以て斯の世に無窮に存する所以なり。[15]

ある者は仏陀と耶蘇の二聖はどちらも出世間の法であって、その情を絶ち戒を種とする所以を主とし、慾に淫すること勿れという。投胎すれば則ち人を死んで塵間の苦趣に堕いることを免れさせ、魂を天堂に遊ばせ、同じく極楽に幸福を享けようとねがわせる。けれども人はもともと慾を多くするために、また形を受けるこの世にもどることに随うのであることをいまだ免れえない。佛耶二聖はそこで更に法を設けて、世界を化して競争の舞台として、大いに兵火を降し或は悪疾におとして人種を滅ぼして後、同じく天堂に帰すものとした。これは則ち必ずしも知ることができない事である。また必ずしも行うことができない説である。ここからすれば孔子は神道を以て設教するとはいっても然れども人より遠くはなれることがないようにして道を為している。こうしてこの世に無窮に存する所以なのである、と李炳憲はいう。「神道設教」によって孔教があり「神道」に重きを置いているのではあるけれども、人とこの世を離れないことが儒教の無窮である所以だと李炳憲が考えていることがここに表れている。

4　「韓日漢満」の諸元神

李炳憲が日本の宗教について述べた部分に次のものがある。ここには『古事記』の冒頭および『日本書紀』の冒頭が引かれて、日本の神と「韓・日・漢・満」の諸元神とともに白山に出現したと推測し、引いては世界の諸宗教の神が共通する存在であることを述べようとしている。

日本の古事記に云ふ、天地新発の時、高天原に成る三神を丹雀叢と名づく。書に亦た云ふ、天地の中唯一物のみ、便ち化して三神と為るとは、其の年代と地点とは攻む可らず。然れども高天原は恐らく是れ白山の原也と。[16]

李炳憲が記すところは次のようになろう。日本の『古事記』にいうところでは、天地新発の時、高天原に成る三神を丹雀叢と名づける。『(日本)書(紀)』にまたいうところでは、天地の中で唯だ一物だけがあって、便ち化して三神と為るとは、其の年代と地点とをさだめることはできないけれども、しかし高天原は恐らくは白山の原

であろう、という。ここで引かれている『古事記』の文章と『古事記』の原文とは異なっている。『古事記』漢文の原文では「新発」ではなく「初発」であり「三神」ではなく「三柱の神」となっている。李炳憲は『古事記』を要約して日本の原初を示そうとしていることが分かる。『日本書紀』の原文では「三神」となっている。記紀には場所は示されていないが先に引いた李炳憲の文章の部分で「白山」と記されているのは「白頭山」のことを指し、白頭山の天池が東アジアの故地となっていると李炳憲が考えていることが表明されている。彼はまた「中華の道家は上帝を以て原始天尊と為す。日本の上古神代、神を併称して尊と為す。大日霊尊は高天原を御して天照大神と号す。諸神に勅して輔と為す也。之に八咫鏡を賜て曰く、之を平にし之を安にして中を執り失ふこと勿れ、と。大己貴神国人を諭して曰く、父母は敬ふ可し、妻子は愛む可し、と。此れ実に大東の宗教と哲学との底処を築く也。尚書の俊に籲て曰く上帝を尊べとは、指す所有る乎。此を以て之を観れば則ち天照大神と曰ひ、檀木神人と曰ひ、帝俊と曰ひ、伏義と曰ひ、天尊と曰ふは同じく一天神也。」とも述べている。中華の道家は上帝のことを原始天尊とする。日本の上古神代には神を併称して尊ともする。大日霊尊は高天原を御して天照大神とよばれる。諸神にみことのりして輔けとさせるのである。これに八咫鏡を賜わっていうことには「之を平にし之を安にして中を執り失ふこと勿れ」と。大己貴神は国人を諭していうことには「父母は敬ふ可し、妻子は愛む可し」と。これは実に大東の宗教と哲学との底処を築くものである。尚書の俊に籲て曰く「上帝を尊べ」というのは、指す所が有るのであろう。ここからこうしたことを観るならば、天照大神といい、檀木神人といい、帝俊といい、伏義といい、天尊というのは同じく一天神のことである。以上のように李炳憲が語ることからすると李炳憲においては、神は諸民族によって名を異にしても上帝たる同じ存在を別の名で表したにすぎないと考えられていることがわかる。孔教とは言いながら上帝を尊崇する教となっていることが理解される。

窃に韓・日・漢・満の族を念ふに、倶に同種を為し、実に白山自り生れ出る也。中華の古史に曰く伏義は仇夷に生ると。又曰く、巨人迹て雷澤中自り出づ。華胥の之を履て伏羲を雷澤に生むと、是れ白山の大池也。

ひそかに韓・日・漢・満の族をかんがえてみると、ともに同種をなしていて、実に白山から生れ出たのである。中華の古史にいうことには「伏羲は仇夷に生れた」という。またいうことには「巨人があるいて雷澤中から出た。華胥がこれを履んで伏羲を雷澤に生んだ」というが、これが白山の大池である。このように李炳憲は記す。韓国・日本・中国・満洲の四族は白頭山を同じく故地としていると考えている。日本の神々は白山に降臨したことになる。こうしたことは「踏海叢談」の「第六孔子は東方の族為り孔教は東方の教為り」にも表れている。「人は孔子の支那の聖為るを知り、東方の族為るを知らず、孔教の支那の教為るを知りて東方の教為るを知らず。則ち殆ど未だ之を思はざる也。易説卦に曰く「帝は震より出づ」と。また曰く「震は東方也」と。万物は皆、東方より出づ。惟だ孔子の東方の族を為すのみならず、何代の何人、孰れか東方の遺裔に非ざらんや。古の緯書に云う、摯・尭・稷・萬は皆な帝俊の子にして帝

俊は東方の上帝也。支那に在れば則ち之に命して摂提天皇と為し、朝鮮は之を称して檀木神人と為し、日本は則ち之を呼びて高天原の一物と為す。神代の所伝の名は各の同じからずして其の実は則ち一也。」[17] 人は孔子が支那の聖であることを知っていても、東方の族であることを知らず、孔教が支那の教であることを知っていても、東方の教であることを知らない。則ちほとんど未だこれについて思いかんがえたこともなくている。易説卦に曰う「帝は震より出づ」と。また曰う「震とは東方のことである」と。万物はみな、東方から出ている。ただ孔子だけが東方の族であるというばかりではなく、何代の何人でも、だれが東方の遺裔でないことがあろうか。むかしの緯書にいうことには、摯・尭・稷・萵は皆、帝俊の子であって帝俊は東方の上帝である。「支那」にあればこれをなづけて摂提天皇といい、「朝鮮」ではこれをいうのに檀木神人として、「日本」はこれを呼ぶのに高天原の一物とする。神代の所伝の名はそれぞれ同じではなくても、その実は一つである。李炳憲はこのように明言している。

帝は東に生まれ出たという易経説卦を引いて、上帝が震すなわち東に出たと言い、さらには東方の人類の起源を白山に考えている。東のみならず全人類、万物は東から生まれたとも述べている。これは世界を大同に向かわせたいという思いから出ている着想とみることも可能であろう。日本の神を考えたとき天照大神と造化三神とは単純には同一視できない。しかしながら李炳憲は神という括りの中に名のみ異なるものとして同化して把握している。孔教は中国人の宗教のみではなく東の宗教であるとすることから全世界の教であるとすることから日本の神も孔子の教えに同化すると考えられていることになる。二十世紀以後は哲理が日に強くなり、宗教と哲学が合一することを知るだろうとする。李炳憲は孔子の教である孔教は哲学と宗教が合一した宗教として全世界の大同教になると考えている。日本の儒教について、李炳憲は「第五論日本儒教及び交通始末」において王仁が日本に儒教を伝えたことを述べながら日本が東アジアの軸たる役割を果しうることを言明している。

日本は撥乱を履み、反て之が動機を正さんとす。蓋し吾が孔子の大道に帰さん哉。日本は未だ中韓漢之儒毒を嘗めざれば則ち之を行ふこと猶ほ手を反するがごとき也。日本の当に軸為るべきは宜しく深く二千年の交通の旧誼を思ひて以て之に処すること有るべき也。

日本は撥乱を履むことで、反ってその動機を正すことになった。おもうに吾が孔子の大道に帰そうとするのであるのだ。日本はいまだ中韓漢の儒毒を嘗めたことがないので則ちこれを行なうことはちょうど手を反すようにかんたんであるようなものである。日本がまさに軸たるべきことは宜しく深く二千年の交通の旧誼を思って、これに処するようにすべきであろう。このように李炳憲は日本の儒教の未来を語る。李炳憲の儒教とは合一する宗教の意であるから、日本の宗教の未来はアジアの軸として孔教に収斂すると観じられていることになろう。この場合の儒教とは「第七論日本当闡今文真経」[18]にあるように「今文の真経」によるものを意味している。

おわりに

李炳憲における「宗教」は「神道」の面に重きを置いて説明がなされるものであった。神道は易経に由来する語でくすしき道をいい神道設教は神道によって教をなしていることをいう。李炳憲は儒教の「教」字には既に神秘性が有り、あえて宗教と言わなくてもよいとする。儒教は精霊を重んじ天人の極致で、軽重から言えば精霊を重んじて肉体を軽んずる教であるとする。ここからすると儒教における政治・哲学は余事であり、儒教を政治・哲学説と捉えることは誤りであることになる。かくして李炳憲は儒教を政治説・哲学説とする見方を批判し、儒教は「神道」を核心とすることを述べようとする。その一方で儒教が無窮であるのは「神道設教」でありながら人の世から離れないところに所以があるとする。李炳憲において「神道」が重視される根拠として「上帝」の存在がある。「帝は神の称である」と李炳憲は言い、人と上帝とは「神」によって通じうる。上帝は時空を越えた存在者、感覚によって捉えられない存在者であるとされる。「太極」は上帝の代名詞であり、理としても理解されうる。儒教は「神道設教」によって孔子により教として成立したもので、「神道」は秩序ある法則として存し、天人を合一する教となっている。時代が進むことで哲理が強くなり迷信が除かれることで宗教と哲学は合一し、既にその両者を区別せず合一している儒教は孔教として世界の大同の教となると考えられている。こうした考えの中に李炳憲の日本の見方もある。李炳憲は日本の圧迫を感ずる中に半島の孔教運動を進めた。李炳憲は韓・日・漢・満は白山に生まれた同族であろうとし、「万念灰のごとし」として日本による祖国の圧迫に嘆きながら、過去同族であった民族が将来において孔教によって合一する日を迎えると考えていた。日本の儒教は王仁によって伝えられたものであることを述べながら、韓・日・漢・満は祖を同じくするが故に儒教の精華を日本は自己のものにして世界の合一に役割を果たすであろうと考えられていた。

（非常勤講師・こばやしひろし）

1　日本では「併合」とされ、韓国では「日帝強占」と呼ばれる。

2　韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年3頁にある「略伝」を参照されたい。

3　以上の記述については拙稿「李炳憲における孔教（一）」『目白大学人文学部紀要』地域文化編　第2号37頁を参照されたい。

4　「儒教復原論・第一章儒教の名義」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年177頁を参照されたい。

5　この場所に「後第5章に詳論当に参看すべし」と註が入っている。「第五章儒教の範囲」には同主旨のことが述べられ、堯舜禹湯文武周公は支那の古聖であり孔子は天下に通行すると語られる。

6　韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年178頁を参照されたい。

7　「儒教復元論・第二章儒教の性質」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年179頁を参照されたい。

8　康有為は「釐里近」とし李炳憲は「釐里尽」としていて用字の差が見られる。両者の差異については拙稿「李炳憲における孔教（二）」『目白大学人文学部紀要』地域文化編第5号15頁を参照されたい。

9 「警告域内同胞儒林」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年159頁を参照されたい。

10 琴章泰「真庵全書解題」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年3頁にもこのことは述べられている。

11 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年159頁を参照されたい。

12 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年160頁を参照されたい。

13 「易経今文考通論」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年を参照されたい。

14 「易経今文考通論」韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年を参照されたい。

15 韓国学文献研究所編韓国名家文集選『李炳憲全集上』亜細亜文化社一九八八年214頁を参照されたい。

16 『李炳憲全集上』209頁を参照されたい。

17 『李炳憲全集』254頁を参照されたい。

18 『李炳憲全集上』254頁を参照されたい。

・本稿は李炳憲の宗教にかかわるこれまでの論考をまとめた二〇〇九年十二月六日神道宗教学会（於國学院大学）の発表をもとに作成した。

View of Japanese Modern in Lee-ByeongHeon

Hiroshi Kobayashi

This paper clarifies that Lee-ByeongHeon's View of Japanese Modern. Lee-ByeongHeon was born in a Korean peninsula and grew up there. He went apprentice to Kang-YouWei who lived in China. Lee-ByeongHeon explained that in the Kong-jiao Theory the religion and the philosophy become same one thing. It is because "Daido (Tadong)" in the world will be seen in the future. It is the same idea Kang-YouWei has. Lee touched the classical Japanese literature at time when the country was being ruled by Japan. He thought also that Japanese Shinto would become the same one thing in his theory.